

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四 八〇三三
京都市中京区蛸薬師通河原町東入
電話 (〇七五) 二五三・〇七〇七

『揺れる情(こころ)』通信³¹』

稲荷山武田病院院長 土屋宜之／元京都医療センター外科部長
前回述べました「言霊」が冷遇されていた時代においても「言霊」はしつかりと庶民の情(こころ)の中に息づいていました。「もののあはれ」を知るといふ働きの中では「言霊」は絶対に必要な存在です。

ここで宣長さんの国学を極めたいという思いの根幹をなしている思想を紹介しましょう。

古言の大切などころはその「文体(かきざま)」にある。『古事記』は「古(いにしえ)の事をしるせる記(ふみ)」で素直に受け取れる名前だが『日本書紀』は『古事記』の真つ正直なやり方が否定されていると宣長さんは非常に嫌っています。健全なものは何の奇もない当たり前なものだという、どんな場合にも動かぬ深い思想をその根幹に持っています。

龍谷ミュージアム

1月9日～2月15日

『ギリシア・ローマ文化と仏教』

現在のパキスタン西北部を中心とするガンダーラ地域には前4世紀以降、ギリシアやローマ、そしてペルシアといった西方の文化が絶えずもたらされ、この地域に伝わった仏教も強くその影響を受けることになりました。なかでもギリシア人の王と仏教僧侶が対話する形式で表現される『ミリンダ王の問い』は多様な考え方を持った人々が実際に交流していたことを示す象徴的な經典といえるのではないのでしょうか。さらにガンダーラ地域においては西方の神々の姿が、仏教彫刻や支配者が発行するコインの図像に取り入れられました。

本特集展示では前2世紀～後5世紀頃のガンダーラ地域に認められるこのような西方の要素を取り上げ当時の仏教を発展させた多様な文化的土壌を紹介いたします。人々が広く移動して交流し、物や情報が密に交換されていたグローバルなユーラシア世界を体感してください。

『安青錦』

常楽臺住職 今小路覚真

日常生活で肌感覚としても縁の少なかったであろう日本語。そうしたウクライナで生まれ育った青年が、大相撲の世界に飛び込み三年ばかりが過ぎました。

卓抜した体力、気力。そして異文化に溶け込める心の持ちようを育て続けられた環境にも恵まれたのでしょうか。安青錦というシコ名をつけられて、幕内に入つて各場所を勝ち越し、しかも十勝以上の成績を残し、九州場所ではついに優勝し、大関にまで登り詰めました。

そして優勝インタビューがありました。見事な、というより流暢な日本語の応答がスピーカーから流れてきました。

力士の会話といえは、わたしの知る限りでは言葉数少なく、何となくぶつさらばうに聞こえることが多くありました。

大相撲の世界に入つて三年の安青錦の日本語の見事さに、驚かされました。溶け込む意識と必要性があれば、青年になつてからでも異生活の言葉が身に付くことを教えられました。

『ワイナリーの1年』

イタシヨク 福村直

ワイナリーは年始よりブドウの剪定を始めます。春が訪れると発芽が始まり、この頃から病虫害防除剤の散布を始めます。初夏にブドウはつぼみから開花へと至りますが、この頃からワイナリーは忙しくなり、若枝の剪定や花穂の間引きを行い9月ごろから収穫が始まります。これは産地やブドウ品種、天候よつて変わり一ヶ月ほど前後します。

収穫はワイナリーにとつて最も忙しく、摘み取られたブドウはすぐに破碎を行い、果汁を樽に入れ深夜を通して醸造を始めます。発酵が落ち着くとワイナリーの仕事もようやく一段落します。この他にもワインのボトル詰めやラベル貼り、展通して行われています。これだけの長く大変な作業でも天候によりワインが台無しになることがあります。しかし素晴らしいワインが出来上がったときのワイナリーの喜びは大きくなります。

『昏るに、日はのこりて』

田村佐起三

ちりめん洋服世界に挑戦③シカゴ

昭和五十九(1984)年渋谷パルク顧客のシカゴ東京銀行頭取夫人からシカゴでショーをしないかと相談を戴き開催へ向かいました。

年末十月開催で進行。私は二ヶ月前に胆嚢炎で胆嚢を摘出しましたが医師に相談の上、日米協会主催さきぞうファッションショーをシカゴアスレチックホールで開催できました。スタッフはシカゴの邦銀各支店長宅に分宿

私は東京銀行瓜生頭取宅にお世話になりました。夫人から挨拶は英語でとアドバイスされ、日本から用意した文章は破棄し秘書に作成させた文章で会場との行き来に発音の練習をし、ショー後のランチ会で四百名の前でスピーチをして絶賛の拍手喝采を得ました。

ショー用の機材や衣装の荷物の運搬で縫合した腹部が開き、黄色い油紙を外す度に激痛を覚え、主治医から二度縫合したのは君だけ！と言われました。

『大原流声明雑話』

實光院住職 天納玄雄

『女院願文』には、最も丁寧な方法で法華經を書写する如法写經会における理念がよく表れている。長元四年(一一三二)に藤原道長の息女上東門院彰子が写經と共に比叡山横川に奉納したものである。

意識すれば「法華經を横川如法堂に奉納する。この經卷は信心の浅い人にはやがて朽ちゆくものと思われるかもしれない。しかし形而上の存在となつて、五十六億年後に弥勒菩薩が成仏するまで保存されるだろう。この經の功德によつて人々が安らかでありますよう。生きとし生けるものが彼岸へと渡りますよう。私は生まれ変わるたびにこの經を人々へ広め、弥勒が成仏する場面に立ち会いたい」というものだ。そしてこの願いは「慈覺大師の如法經の誓いと志を同じくするもの」なのである。